

二〇二五年度 桐朋女子中学校入学試験 (B入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから16ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑩の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑪～⑮の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|----------------|---|-------------|
| ① | シユクシヤク五万分の一の地図 | ② | イチョウの調子を整える |
| ③ | ハイクをよむ | ④ | 楽器をエンソウする |
| ⑤ | ウチュウにあこがれる | ⑥ | お金をヘンサイする |
| ⑦ | 事情をカンケツに述べる | ⑧ | チームにシヨゾクする |
| ⑨ | 今にイタル | ⑩ | かげでカクサクする |
| ⑪ | 尊い命を守る | ⑫ | 石灰をまく |
| ⑬ | 徒労に終わる | ⑭ | 物事の筋道 |
| ⑮ | 紅梅の枝 | | |

二、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) ①～⑤は魚に関することわざです。ことわざの下に記した意味となるよう空らんに入る魚の名前を答えなさい。答えは平仮名で答えて構いません。

- | | | | |
|---|----------------------------|----|------------------------------|
| ① | () の頭も信心から | —— | いったん信じてしまえばどんなものでもありがたく思えること |
| ② | 海老 ^{えび} で () をつる | —— | 手間をかけず少ない元手で大きな利益を得ること |
| ③ | () をよむ | —— | 都合の良いように数字をごまかすこと |
| ④ | まな板の上の () | —— | 自分自身ではどうすることもできず身を任せるしかない状態 |
| ⑤ | () のふん | —— | 一人の人間にたくさんの人間がついて回っている状態 |

(2) 線部がかかっていく言葉を記号で答えなさい。

ア イ ウ エ

① わたしは 静かな 教室で 本を 読む。

ア イ ウ エ

② たくさんの 星が 夜空に さらさらと かがやく。

ア イ ウ エ

③ 部屋の 中で 楽しく 音楽を 聞く。

ア イ ウ エ

④ いつか 海辺に 大きな 家を 建てたい。

ア イ ウ エ

⑤ 医師に 食事を 規則正しく とるように いわれた。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」等も一字と数えます。

あるルールが、正しい行為と間違った行為を区別する基準として機能するとき、そのルールは正義と呼ばれます。私たちの社会はそうした正義なしには成り立ちません。だから、ルールを変えることができない、ということは、決して、いかなるルールも必要ではない、ということの意味するのではないので

す。私たちは (a) あくまでもルールに頼って生きています。問題なのは、そのルールが一つではないということ、変更されうるものだということです。

当然のことながら、① ルールの変更が起きるとき、つまり正義が移り変わるとき、それに支えられた既存の社会は不安定になります。それまで自分が正しいと思っていた行為が、実は間違っていたことになるからです。

ヴィクトル・ユーゴーの小説『レ・ミゼラブル』は、そうした正義の変更に * 翻弄される人々の運命を、* 多層的に表現した作品であると言えるでしょう。

物語は、もともと犯罪者であった主人公ジャン・バルジャンが、フランス革命をはじめとするさまざまな出来事に遭遇するなかで、* 聖人へと変容していく様子を描いていきます。そして、宿敵として彼と何度も * 対峙するのが、ジャベール警部です。

物語の冒頭、刑務所から仮出所した彼に、ジャベール警部は「危険人物」であることを表す証明書を渡します。当時の社会では、罪を犯したバルジャンは、仮出所しても * 依然として ② 公的な監視の対象だったのです。バルジャンは罪を犯したのであり、ルールに違反しました。それに対して、彼を監視するジャベール警部は、あくまでもルールに則^{のつ}って行動しています。ジャベール警部は、自分こそが正義を実現していると信じて疑わないのです。

心の荒んだバルジャンは、教会にあった銀の燭台を盗み、警察に逮捕されます。仮出所したばかりの彼が窃盗罪で裁かれれば、より重い刑を処されることは間違いありません。ところが、教会の神父は、その燭台は盗まれたのではなく、自分がバルジャンに渡したものだ、と警察に説明します。それによって、バルジャンは無罪となって放免されることになりました。バルジャンはこの神父の行動に * 驚愕します。そして、自分自身もこの神父のように、正しく生きようと決意するのです。

ここで注目すべきは、この神父もまた、実はルールに反する行為をしている、ということなのです。なぜなら、^③ 神父は警察に対して偽証ぎしやうをしているからです。神父の行為は当時の社会の正義に従えば「 i 」^①、ということになります。しかし、神父はむしろ、自分の行為こそが「 ii 」と確信していたはずなのです。つまり、この状況じやうきやうにおいては、社会の正義に従わないことこそが「 iii 」と判断していたのです。

その後、バルジャンは人生を通して、神父が実践じっせんした「正しい生き方」を追求します。その様子を目の当たりにしながらも、ジャベール警部は、依然として彼に対する疑いを解きませんでした。一度罪を犯し、仮出所中に窃盗を犯した彼は、きっと邪悪じやあくな人間に違いない。そう信じて疑いません。なぜなら、それがその社会の常識であり、正義だからです。しかし、バルジャンはそうしたジャベール警部の思い込みを、あるいは^④ その社会の常識を、^{*} 覆くつがえすような善行を実践していきます。

あるとき、バルジャンとジャベール警部は革命の動乱に巻き込まれることになりました。バルジャンが革命派に関わることになった一方、^{*} 体制派のジャベール警部は、スパイとして革命派の中に潜入せんに入することにしました。非常に危険な任務であることは言うまでもありません。不運にも、ジャベール警部はスパイであることが^{*} 露見ろけんし、革命派のメンバーから殺害されそうになります。ところがそのとき、バルジャンが彼の命を助け、秘密裏ひみつりに逃にがしてやりました。この出来事もまた、ジャベール警部にとって、極めて大きな衝撃しょうげきでした。バルジャンが邪悪な心を持った犯罪者である、という彼の先入見は、徐々に揺らぎ始めるのです。

その後、バルジャンとジャベール警部は再び対峙します。ところが、ジャベール警部はもはやバルジャンを逮捕しようとはせず、そのまま見逃してしまうのです。彼は、もはやバルジャンを疑い続けることができなくなり、彼が正しい道を追求する聖人であることを、認めざるをえなくなったのです。

この物語が示しているのは、「正しい生き方」というものが、決して社会のルールに単に従うことではなく、その都度、自分で判断しなければならぬものである、ということに他ならないでしょう。

バルジャンが巻き込まれていったフランス革命は、歴史的にも、ヨーロッパのルールに大きな変更をもたらした出来事でした。（中略）

『レ・ミゼラブル』が描き出すように、ルールを変えるために戦うことは、人々に多大な犠牲^{ぎせい}を強^しいることになります。それは、一時的に世の中に大きな混乱を招く^{まね}ことになるからです。それでもルールを変えなければならないときがあるからこそ、人々は立ち上がるわけです。しかし、それならみんなが一つのルールに適応してしまった方が、いろいろと楽なのではないでしょうか。そうすれば、社会に混乱も起こらないし、戦いが起こることもありません。なぜ、世の中はそうならないのでしょうか。

このような考え方に異を唱えた人物がいます。ドイツ出身で、アメリカで活躍^{かつやく}した政治家である、ハンナ・アーレントです。

もしもすべての人が一つのルールに適応してしまったら、世の中はどのようなのでしょうか。アーレントによれば、そこでは誰も^{だれ}が同じように考え、同じように行動し、同じような生き方をする世界になってしまいます。多様性は失われ、社会は画一的になってしまふのです。彼女はそれを、すべての人々が「一人の人間」になってしまふ、という事態として説明しています。

《Ⅰ》、事実として、このような世界は決して成立しません。《Ⅱ》、人間は誰もが異なる存在であり、この世界に一人として同じ人間は存在しないからです。アーレントは、そのようにこの世界に存在する人間が多様であるという性質を、「複数性」と呼んでいます。

人間は、複数性をもつからこそ、かけがえのない存在であり、他者には置き換えることのできない個性を持っています。それは同時に、人間は誰もが前例のない存在であるということ、《Ⅲ》この世界に初めて生まれてきた存在である、ということでもあるのです。

ここからアーレントは、人間がこの世界に生まれてくるということ、世界に新しい始まりをもたらす出来事として説明しています。「私」とまったく同じように考え、行動し、生きる人間は、この地球上において、ただ一人として存在しません。だからこそ、「私」には、これまでの人々が誰も想像しなかったことを、誰も考えもせず、行動することもなかったことを、新しく始めることができるのです。

人間が複数性をもっている、ということは、この世界では誰もが新しく何かを始めることができる、ということ、だからこそ、私たちには社会のルールを変更することができるし、また新しいルールを作り出すこともできます。それが、^⑤アーレントの考える人間の条件なのです。

（戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』筑摩書房）

* 翻弄される——ふり回される

* 多層的——さまざまなことが重なり合っていること

* 聖人——人々から尊敬される優れた人

* 対峙——対立するもの同士が向き合ったままじっと動かずにいること

* 依然として——前と変わらず

* 驚愕——ひどく驚くこと

* 覆す——根本から変える

* 体制派——革命派に対応する言葉で国家の中心的な派閥はばつ

* 露見——明らかにすること

問い一、——線部(a)「あくまでも」・(b)「徐々に」の本文における意味として、最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(a) 「あくまでも」

ア 少なくとも

イ 思った通りに

ウ おやみに

エ どこまでも

(b) 「徐々に」

ア とつぜんに

イ だんだんと

ウ やつとのもので

エ いつの間にか

問い二、——線部①「ルールの変更」とありますが、これは何が変わることを意味していますか。「が変わること」につながる形になるよう、本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問い三、——線部②「公的な監視の対象」とありますが、この対象とはどのような人物ですか。最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 暴力をふるうため、多くの人々に危険をおよぼす可能性があると考えられている人物。

イ 社会のルールに反したため、その行動を常に見張らなくてはいけないとみなされている人物。

ウ 警察と対立しながらも、自分こそが正しいのだと信じて行動し、人々に注目されている人物。

エ 罪をつぐなうよりよい人間になろうと努力し、その努力が人々から認められている人物。

問い四、——線部③「神父は警察に対して偽証をしている」とありますが、「偽証」とは、「いつわって証言すること」という意味の語です。神父の説明が偽証であると言えるのはなぜですか。四十字前後で答えなさい。

問い五、空らん「 」i↘iiiには、「正しい」「正しくない」のどちらかが入ります。次の中から適切な組み合わせを選び、記号で答えなさい。

ア	i	正しい	ii	正しくない	iii	正しい
イ	i	正しくない	ii	正しい	iii	正しくない
ウ	i	正しい	ii	正しくない	iii	正しくない
エ	i	正しくない	ii	正しい	iii	正しい

問い六、——線部④「その社会の常識」とありますが、この内容に当たる一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

問い七、空らん《 》I↘IIIに入れるのに最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア	しかし	イ	つまり	ウ	たとえば	エ	なぜなら
---	-----	---	-----	---	------	---	------

問い八、——線部⑤「アーレントの考える人間の条件」を、アーレントがそのように考える理由もふくめて四十五字以内で説明しなさい。ただし、「ルール」という言葉を用いてはいけません。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

中学一年生の「要」^{かなめ}は、自分のことを表現するのが苦手でなかなか友だちがつくれない。運動が得意で活発な「光」^{ひかり}がクラスでただ一人の理解者である。クッキー作りをするのが趣味だった要は、光に料理の先生である「がみババ先生」を紹介され、通うようになる。また最近、要の住む団地の隣室にネパールから引っ越して来た年齢の近い「サリタ」と、偶然言葉を交わすようになった。ある日、がみババ先生の所で作ったブルーベリージャムとクッキーの差し入れをする
と、サリタはひとり、部屋でネパールの教科書を読んでいた。

「サリタちゃん、学校、好きだった？」

聞いてから、あ、と思った。サリタちゃんの表情が暗くかける。①ネパールと日本、どちらの学校を

思い浮かべたのかは、聞かなくてもわかった。

「いや。いかない」

「そっか。……何が、いやだった？」

たずねると、サリタちゃんは『I』『一点を見つめた。しばらく考えこんだあとで、「おひるじかん」とつぶやいた。

「お昼時間って、給食の時間？ 学校の、給食が、おいしくなかった？」

「きゅうしよく……みんな、きゅうしよく。わたし、ランチボックス」

ランチボックス、ということは、サリタちゃんは家から持っていたお弁当をお昼に食べていたんだろうか。小学生のとき、食物アレルギーのある子がときどきお弁当を持ってきたのを、わたしも見

たことがある。

「みんな、みる。わらう」

「笑う？　なんで……」

「わらう。わたし、たべる、ひとり」

怒おこっているようにも、悲しんでいるようにも見える表情で、サリタちゃんは小さく言った。
周りからじろじろ見られて、笑われたりしながら、一人でお弁当を食べる。

想像するだけでおなかがいきりきりして、わたしはいてもたってもいられなくなった。

「サリタちゃん、ちょっと、待っててね」

「まって？　なに？」

「何かできないか、わたし、考えてみるから」

光ちゃんには頼たよってもらえなかったけど、サリタちゃんの助けにはなれないだろうか。

料理と、がみババ先生のカも借りて。

翌日、わたしは図書館に行って借りられるだけの本を借り、がみババ先生のお店に向かった。

「なんだいあんた、そんな大荷物抱かかえて」

「あの、これ、全部レシピ本なんです」

抱えてきた本をレジカウンターに《Ⅱ》置く。どれも、お弁当関係のレシピが載のった本だ。

「お昼の時間がゆううつじゃなくなるようなお弁当って、どうしたら作れますか？」

《Ⅲ》、がみババ先生が片眉かたまゆを上げる。

「ああ？　弁当？」

「はい、サリタちゃんが、お昼の時間がいやだったって言ってて、じゃあお弁当で力になってあげ、痛^つ」

がみババ先生はわたしの鼻先を指ではじくと、深く息を吐^はいて和室をあごでしゃくる。いつものように上がらせてもらって、わたしは事情を説明した。

「――で、二学期になったら、サリタちゃんに週一くらいでお弁当を渡^{わた}せるように、今から練習しておきたいんです。なので、がみババ先生に教えてもらいたいんです」

「いやだね」

即答^{そくとう}されて、わたしは (a) 面^{めん}食^{じき}らった。

「え？ えっ？ なんですですか？」

「② あたしが納得^{なつとく}できないからさ」

「あの、ちゃんとサリタちゃんから話を聞いて、お昼の時間がいやだってわかったんです。③ 本^{ほん}当^{とう}につ^つらそうで、だから」

「そんなのあたしにや関係^{かんけい}ないね」

ひどい。わたしは唇^{くちびる}をかんだ。がみババ先生って、こんなに冷たい人だったの？ 地域^{ちいき}の人のための食堂^{じきやう}には協力^{きやうり}するのに、どうしてサリタちゃんのためには力を貸^かしてくれないの？

こうなったら、わたし一人でがんばってみるしかない。

《 IV 》 立ち上がりかけると、ちゃぶ台にがみババ先生のこぶしが落ちた。

「座^{すわ}りな。まだ話は終わ^{すわ}ってないよ」

わたしは素^す早^{はや}く座^{すわ}り直^すした。

「よし。じゃああなたに聞くよ。サリタには親がいるはずだね？　その親が、『子どもの弁当を自分たちの代わりに作ってくれ』ってあなたに頼みでもしたのかい？　それとも、サリタ本人が『わたしのお弁当を作って』とでも言ったのかい」

「だけれども、頼まれてないです」

シャツのすそをぎゅっと握りしめて、続ける。

「でも、サリタちゃんの両親はいそがしいって聞いたし、日本っぽい、ふつうのお弁当を作るのはおぼかしいかもと思って」

「弁当にふつうとか、日本っぽさを求める理由はなんだい？」

「クラスで仲間はずれにならないように、です。みんなと同じものを食べられないうえに、お弁当をじろじろ見られたりからかわれたりしたら、ますます苦しくなっちゃうから」

「食べられないんじゃないくて、食べないんだろうねえ」

がみ巴巴先生はにやりと笑った。

「あなた、だれの味方してんのさ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

そんなの、決まってる。わたしは最初から、サリタちゃんの味方……なのに。

「周りとかがうからって仲間はずれにしたり、からかったりするやつらのほうが、どう考えたっておかしいだろ。なのになんでそいつらに合わせてやらなきゃならないんだい」

わたしはうつむいた。がみ巴巴先生の意見は正しい。でも、わかってない。学校で、教室で、少数派になってしまふことの心細さを。仲間の輪から外されてしまわないように、わたしたちがどれだけ神経を使って日々を過ごしているかを。

大人は、どうして忘れてしまうんだろう。それとも、強い人にはわからないの？

「納得できないって顔だね。じゃあ百歩譲^{ゆず}って、あんたが週に一回、サリタの弁当作りを引き受けたとしよう」

「はい」

「それ、何年間続けるんだい？」

何年？ え、年……？

「週に一回とはいえ、弁当作りは大変だよ。前日までに何を作るか決めて、材料を買って準備して、朝早く起きて調理する。前日の晩の仕こみが必要にもなるかもね」

淡々と、がみババ先生は続ける。

「しかも、ただ調理するんじゃないよ。昼まで傷^{いた}まないか、持ち運びの最中に汁漏^{しるも}れしないか、サリタの食べないものが入ってないか注意しつつ、味と見た目にも気を配って作るんだ。材料だってただじゃないし、手間もかかる。神経も使う」

「……はい」

「それであんたが『もうむりだ』って弁当作りを途^と中^{ちゆう}で止^やめたら、相手はどう思うだろうね」

サリタちゃんの気持ちになって、想像してみる。怒るかもしれないし、悲しむかもしれない。突^つき放されたど、思ってしまうかもしれない。

心に余計な傷を、つけてしまうのかもしれない。

「(b) そもそもね、あんたがむりして作った弁当を、サリタは心からおいしく食べられるのかい？」

④ 《 V 》 した。そして、うなだれる。
恥^はずかしかった。

サリタちゃんのことを思いやっているつもりで、本当に『つもり』だったんだ。

顔が、上げられない。がみババ先生は短いため息をつく、わたしが持ってきた本の山をぽんと軽く叩いた。

「一つ、宿題を出そうか」

「宿題？」

「ああ。サリタといっしょに料理をしてごらん。作るのはお互いの食べたいもの。作るときは家の人に協力を頼んでもよし。まずは二人でよく話して、作りたいものを決めて、あたしに報告しな。作りかたはあたしが教える」

突然、どうしたんだろう。その意図がわからずにいると、がみババ先生は近くの紙を引き寄せ、二つの漢字を乱暴に書き付けて、言った。

「⑤『友』は、『共』からだよ」

（落合由佳『要の台所』講談社）

問い一、——線部①「ネパールと日本、どちらの学校を思い浮かべたのかは、聞かなくてもわかった」

とありますが、サリタが思い浮かべたのはどちらの学校だと考えられますか。答えなさい。

問い二、空らん《 》I Vに入る最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。た

だし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア びくつ イ じつ ウ どさり エ はつ オ のろのろと
カ しずしずと

問い三、——線部(a)「面食らった」・(b)「そもそも」の意味として、最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(a)「面食らった」

ア とつぜんのことにあきれかえった イ 打ちのめされて気分がおちこんだ
ウ 顔が上げられないほどつらかった エ 予想しなかったことにとまどった

(b)「そもそも」

ア 考えてみると イ もともと
ウ 仮に エ 例えてみると

問い四、——線部②「あたしが納得できないからさ」とありますが、この時のがみババ先生の思いと、この言葉を受け止めた要の理解は食いちがっていると考えられます。そのちがいについて説明した次の文章の空らんに入る適切な言葉をそれぞれ十字程度で答えなさい。

「がみババ先生」は、サリタの両親から「1」とお願いをされたわけでもないのに、要が「2」ことに納得できない。

「要」は、サリタの「3」をがみババ先生にうまく伝えられなかったため、自分がなぜサリタにお弁当を作ろうとしているのかを納得してもらえていないと考えた。

問い五、——線部③「本当につらそうで、だから」とありますが、この後に省略されている言葉として、最も適切だと思われる一文を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周りからじろじろ見られていやな思いをしないように、お弁当を作ってあげたいんです。
イ わたしが、周りのみんなをあっと驚かせるようなきれいなお弁当を持たせてあげるんです。

ウ サリタちゃんが楽になるように、わたしが身代わりになってあげたいと思っています。

エ 周りから笑われながら一人で食べるつらさをがみ巴巴先生にもわかってほしいんです。

問い六、——線部④「恥ずかしかった」とありますが、がみ巴巴先生の投げかけに対して、

(1) 要は何に気づいたのですか。二点答えなさい。

(2) なぜ要は恥ずかしかったのですか。七十字以内で答えなさい。

問い七、——線部⑤「『友』は、『共』からだよ」とありますが、突然の宿題に対してその意図が理解できずにいた要に、がみ巴巴先生はどういうことを伝えたかったのでしょうか。次の場面のがみ巴巴先生の言葉を参考にして説明しなさい。

「あんたさ、『どうせまづくなる』なんて思いながら料理はしないだろう？ 人と人のあいだのことも同じだよ。悪いほうばかりにとらえてると、うまくいくものもいなくなる」

ギョウザにきれいなひだを作りながら、がみ巴巴先生は話を続ける。

「だれかと友だちになるっていうのは、相手と一つの料理を作るようなものなんだよ。いろんな調味料や具材を足したり、ときには水で薄めたりしながら、二人がおいしいと思える味を根気よく探っていくんだ。自分だけががんばるんじゃなく、相手だけに任せるんじゃなく、お互いに力を合わせてね」(同書より引用)